

紅美鈴 と行く
Hong Meiling

北京 食歩 ぐき



～この番組はご覧の スポンサーと、案内人 紅美鈴、ZNNの提供でお送りします～
ナレーター：因幡

登場人物は最後の項を参照の事。もちろん東方 project を知らない方でも十分お読みいただけます。

第1歩 北京空港から。旅の始まり

美鈴：「みなさん、全員いますね？」

何気に迷子の確認を行う。

咲夜：「大丈夫だ。問題ない。」

咲夜がキャラ崩壊を含んだ笑いを浮かべるが、美鈴は不安そうである。それもそのはず、今回の旅のメンバーには問題児がいるのだ。

レミ：「よし、咲夜。四つん這いになりなさい！」

咲夜：「はい。喜んで。」

フラ：「ねえ。中国って、**とか持っているの？」

美鈴：「ここでそんな話をしてはいけません！」

あれ？ 美鈴はあたりを見回した。さっきまでいたはずのパチュリーがいない。

美鈴：「パチュリー様知りませんか？」

咲夜：「あ、喘息の発作が起こったんで帰った。」

美鈴：「……」

4人はタクシーに乗り込んだ。空港から市内までは30分以上かかる。

レミ：「で、今日の旅の主旨は何？」

美鈴：「はい。今回は北京食べ歩きの旅を計画しております。」

フラ：「ねえ。それよりも**とか見に行こうよー」

咲夜：「そんなものより私の**のほうがエキサイティングですよ。妹様。」

フラ：「うざい。」

レミ：「北京で食べ歩き、たとえば、北京料理かしら？」

美鈴：「ええ。でもそれだけじゃないですよ。北京で食べられる中国料理にもいろいろありますからね。」

レミ：「え？ 中華料理って全部北京料理じゃないの？」

美鈴：「は？ バカじゃねえの？ 中国なめんなよ？」

レミ：「えっと……、なんか……ごめん。うん。」



中華料理イロイロ

スキマ知識!

東方系 上海料理

豊富な魚介類と野菜を生かした料理たち。コクの深い濃厚な味わい。醤油など、日本っぽい調味料が多く使われるため、日本人には親しまれやすく、家庭料理として既に定着している料理も多い。八宝菜やワンタンはまさにそう。今夜のおかずに出てきそう。

しかし本場の上海料理はなんとも高級だ。(さすがに日常的に上海ガニを丸ごと食べる家はないだろうから、)上海ガニなどを食べるのは我々貧乏人の夢の一つであろう。

ああ、こんな話をしているとパソコンがよだれでまみれますな。



画像 (上 上海ガニ)

(左下 八宝菜; 右下 ワンタン)

南方系 広東料理

「飛ぶものは飛行機以外、二つ足は親以外、四つ足は机以外、走るものなら自動車以外、泳ぐものは潜水艦以外」はなんでも食べる、といわれる広東人。ならば、船や自転車や彼女も食べるのだろうか? と屁理屈を言ってみたくなる……。

つまりなんでも食べるということ。犬、蛇、燕の巣、まさかの穿山甲。この地域も魚介類や野菜が豊富でフカヒレなどと言った高級食材もあるのだが、まさかまさかの食材が飛び出す。蛇煎餅を見せられた日にはどうしようかと思った……。

実は広東料理にもいろいろある。特に広州料理は有名であろうか。



画像 (左 點心; 右 酢豚)

(次頁 上部)

蒸したりスープにしたり、というのが基本らしい。確かに飲茶や(滅多に口に入らない)フカヒレスープは印象的である。マニアックな料理を避けると、やはり酢豚とかが残るだろうか。そういえばオイスターソースはこの辺が発祥らしい。おいっすー。



西方系 四川料理

個人的にもっとも好き。辛いのがたまらない。



画像（左上 担担麵；右上 麻婆豆腐）

（左下 回鍋肉；右下 日常における回鍋肉の様子）

麵は非常に有名だ。削った麵とか、ユニークな麵もあるが、やはり代表的なのは担担麵である。しかし、本場は日本と少し違う。汁が無いのだ。そして結構辛い。

麻婆豆腐も本場は違う。本場はとにかく辛い。花椒という香辛料をとにかくかけまくるのが本場。辛くて食えない。それゆえ日本の麻婆は花椒抜きが多い。

辛い物が好きな日本人は多いようで、

四川料理も既に家庭料理となっているものが多い。見よ、回鍋肉は既に**日常**に普及している。

地理的に海産物は少な目。また、多湿な気候から辛い物が多いようだ。(スタミナ料理的な感じか?) まあしかし、食べるのにスタミナを使いそうな料理だ。

北方系 北京料理

今晚のメイン、お待ちかねの北京料理である。北京料理は実は北京固有の料理ではない。宮廷料理だったのだが、貴族が中国全土の料理を食べたいと願ったためいわば寄せ集めとなっている。この料理を大成させたのは宮廷料理人であり、それゆえ寄せ集めな料理を「北京料理」と呼ぶようになったのだという。



画像（上 北京ダック）

（左下 水餃子；右下 葱油餅）

北京料理と言えば北京ダックが真っ先に思い浮かぶだろうか。北京ダックはアヒルを丸焼きにしてその皮を削ぎ切りにして食べる。当然皮だけでなく、中国で

は肉も水かきも無駄なく食べる。

わが世界文化研究会は料理も行っているが、今回は水餃子である。なんで焼き餃子じゃなくて水餃子なんだろうか。確かに水餃子の方が見栄えがするから、とか、予算の問題とか、いろいろあるが、やはり天下の世界文化研究会という立場から次のように答えよう。「本場中国では、水餃子こそが主流だから。」

日本では焼き餃子が多い気がするが、中国では水餃子が主流。揚げ餃子も少数派だそうだ。

北京ダックは置いといて、餃子は昨日の晩御飯になっていたし、葱油餅（ツォンユープン）やパオは中華街の屋台なんかでよく見かける（これも北京料理の一味）。宮廷料理は今や庶民の食べ物なのだ。

タクシーの中……

長い長いうんちくが終わるころ、彼女らは既に目的地についていた。

第2歩 天安門から。火鍋のある処



レミ「なんでこんなところに来るの？」

美鈴「だって天安門に来ないと、北京って感じが読者に伝わらないじゃないですか。」

レミ「読者……？ 誰？ それ？」

一応記念撮影……パシャ。

フラ「ねえ。あそこに北京ダックがあるよ。」

美鈴「いいえ。あれは毛沢東様です。」

フラ「ねえ。あれが毛沢東？」

美鈴「いいえ。ケフィアです。」



4人、街を散策中。

（上 ケフィア；）

レミ「見て。回転ずしがあるわ。」

美鈴「ええ。中国では人気なんですよ。」

咲夜「喜多方ラーメンあるぞ……」

美鈴「あっても不思議はないですね。」

フラ「ねえ。段ボール肉まんがあるー。」

美鈴「ありません。」

レミ「屋台とか出てるどこないの？」

美鈴「ありますよ。でも、とりあえずランチにしません？」

咲夜「OL気取ってんじゃねーよ。」

美鈴「……あの、咲夜さん、男っぽくなりました？」

※言い忘れましたが、これは東方 project の2次創作です。キャラ崩壊がありますので閲覧はご注意ください。※

老舗、『東来順飯庄』にて。

レミ「これは豚しゃぶかしら？」

美鈴「残念！豚ではなく羊でしたー！」

レミ「羊!？」

フラ「ねえ。この間羊を解体したんだけど……。」

美鈴「しないでください。」

咲夜「ナイフで解体しましたが何か？」

美鈴「こえー……。」

レミ「私……羊苦手なのよね……。」

「なんだか臭みがあるし。」

美鈴「大丈夫ですよ。この店の羊は厳選された内蒙古産のお肉で臭みがないんです。」

レミリアはお肉をしゃぶしゃぶして恐る恐る口に運ぶ。

レミ「ん!?! おいしいじゃない。本当に羊なのかしら。牛みたい。」

美鈴「ね、おいしいでしょ？」

フラ「すみませーん。メニューのここからここまで全部ください。」

美鈴「やんめてくださいー。」

レミ「この鍋、変わってる。」

美鈴「この店の特徴ですね。お肉、気を

付けないと真ん中の煙突みたいなのにくつつくと焦げますよ。」

咲夜「焼肉になりましたが何か？」



画像（上 涮羊肉 in 『東来順飯庄』）

レミ「なんで羊なの？」

美鈴「中国では羊のしゃぶしゃぶは涮羊肉(シャンヤンロウ)といって普通なんです。ちなみに、中国ではしゃぶしゃぶを火鍋と言いますね。」

レミ「なるほど、中国版しゃぶしゃぶってわけね。」

美鈴「いいえ。日本のしゃぶしゃぶの起源は中国だといわれています。だから中国こそしゃぶしゃぶの本場なんです。発言には気を付けてください。」

レミ「ごめんなさい。」

美鈴「さて、お次は屋台、行きませんか？」

第3歩 屋台の街から。食の溢れる処

東華門美食坊夜市にて

ここは天安門から北東に位置する屋台街。多くの屋台が軒を連ねる。

レミ「屋台か。たまにはこういう庶民的なところもいいわね。」

咲夜「お嬢様カッコイイ!!」

レミ「甘いものとか食べたいわね。」

美鈴「あれなんかどうです？」

レミ「ゼリー……かしら？」



画像 (上 ゼリー的な何か)

咲夜「買ってきましたよ。」

レミ「なにこれ!? 砂糖かけ過ぎじゃない?」

美鈴「いえいえ。ゼリーに砂糖が入っていないので、ちょうどいいんですよ。」

レミ「ぱく。うん。おいしいじゃないん? これトマトかしら?」

美鈴「ええプチトマトです。」

咲夜「肉まん買ってくる。」

レミ「見て。キウイの串刺しよ。」

美鈴「ここは串刺しが多いですからね。」

レミ「7元……ってことは……。」

美鈴「100円くらいですね。」

レミ「案外安いよね。普通屋台と違って高いのに。」

美鈴「まあ物価も違いますしね。」

咲夜「この肉まん……コンビニの方がうまいぞ。」

美鈴「そんなこと言わないでください……心が……痛みます。」



画像 (上 屋の東華門美食坊夜市)

美鈴「あれ……妹様は?」

フラ「呼んだ?」

その手に握られていたのは……串刺しのサソリ。

レミ「ひゃっ! 何よそれ、どこで拾ってきたの? すぐに捨てなさい!」

フラ「え? なんで? おいしいよ。」

がぶり、と食らいつく。

レミ「とうとう……フランがだめな子になっちゃった……。」

フランを見るレミリアの目は、悲しそうだ。

美鈴「大丈夫ですよ。拾って食べたのでありません。あそこに売ってます。」

レミ「なにが大丈夫かわからない。あと、目に毒なものを見た気がする……。」



画像(上 サソリとかサソリとかサソリとか……)

(下 ヒトデ、奥にあるのはムカデ)

レミリアが見たのは、串刺しにされたサソリや虫たち。それらは綺麗に整列していて非常に、綺麗だ。

フラ「このばりばりしてるのおいしーい。

何これ？ あ、サソリさんの足だ。ぱく。」

レミ「駄目だ……。見てられない。」

美鈴「さすがに私も食べたことはないですが結構売ってますよ、スタイリッシュ珍味。」

レミ「スタイリッシュとかそんな甘ったるいもんじゃないわね。中国人ってこんなもの食べるの？ 無理だわ……。」

美鈴「中国人に対して失礼な発言は万死に値します。」

レミ「えっと……なんか、ごめん。」

咲夜「これはなんだ？」

美鈴「羊の睾丸です。」

フラ「え！ なになに？ 羊の金たm……」

美鈴「言っではいけません！」

咲夜「このヒトデは普通においしそうだ。」

美鈴「あ、でもそれあんまり味ないですよ。」

フラ「ムカデっておいしいじゃん。」

※ムカデの串刺しの写真は作者が嫌だったので載せません※

美鈴「こういうのもいっぱい売ってますけど、やっぱり普通のお肉とかが一番人気ですから。お肉、食べに行きましょう。」



画像 (夜の東華門美食坊夜市)

第4歩 晚餐

老舗、『全聚徳』にて、

北京には夜が訪れようとしていた。そんな頃、4人は……

レミ「なんだか凄い建物よ。」



画像（老舗、『全聚徳』）

美鈴「ええ。ここ、実は北京ダックの店なんです。」

フラ「ねえ。さっき北京ダック見た。」

美鈴「あれは毛沢東様です。きちんと覚えましょう……。」



咲夜「手さばきスゲー。」

美鈴「まさに職人技ですよ。」

咲夜「俺もああやってもっと素早くナイフ使いたいぜ。その時はよろしくな。」

美鈴。」

美鈴「え、ええと。何をよろしくされたのか分からない。それと、一人称「俺」はさすがにキャラ崩壊が……。」

フラ「ねえ。早く食べたいー。」

美鈴「おっと失礼。注文しましょう。」

レミ「北京ダックって皮を食べるのよね？」

美鈴「ええ。アヒルを焼いて皮を削ぐんです。でも皮しか食べられないわけじゃないですよ。ああ、ほら。」

レミ「何!?! このしぼんだスポンジボブみたいなモノは!?!」



画像（アヒルの肝）

美鈴「アヒルの肝ですよ。フォアグラとはちょっと違いますけどね。」

咲夜「……なんかパサパサしてるぞ。」

フラ「なにこれおいしー♪」



画像（アヒルの砂肝）

レミ「そしてこれは何!? 私が知ってる北京ダックと違う。」

美鈴「アヒルの砂肝です。」

レミ「色が……。」

咲夜「あ、コリコリ感がなかなか。」

フラ「おいしー。ひゃっほーい♪テンションあがってきた! 今ならアメリカとか一人で倒せそうな気がする!!」

レミ「やめてよ……笑えないから……。」

しばらくすると何かが運ばれてくる。



画像 (左 砂糖と甜麵醬; 右 荷葉餅)

美鈴「こっちが砂糖、こっちが甜麵醬
トッピングはきゅうりとネギです。北京ダックはこの調味料につけて、こっちは荷葉餅(へヨウピン)に巻いて食べるんです。」

間もなくメインの北京ダックが運ばれてくる。



画像 (北京ダック)

レミ「うん。安定のメインだわ。」

咲夜「結構こってりしてる。」

フラ「ぱりぱりこーばしーい。」

レミ「あれ? なんか運ばれてきたみたい。」

咲夜「スープ? メインの後にスープかよ。」



美鈴「ああ、これは北京ダックのスープですよ。」

フラ「ねえ。この白濁液がスープ?」

美鈴「もっと適切な表現を使ってください。」

フラ「へい! 店員さん。メニューのここからここまで
全部ください。」

美鈴「やんめてください……手遅れだったか。」

レミ「もう食べられないよ!」

※余った分はその後スタッフがおいしくいただきました※

エピローグ

満腹でホテルに着いた4人。彼女らはどんな夢を見るのだろうか

Good Luck!!

後書き

こんにちは、こんばんは。因幡です。どうも調子が出なくて、面白くないダダスベリネタしか書けない今日この頃であります。

わが総統、松永会長から「北京」というお題を頂いたとき、かなり不安でした。中国と言えば美鈴しか思い浮かばなかったからです。でも松永会長は励まして下さいました。

「大切なのは、読んでほしいという強い気持ちだから。」(会長より)

私は涙しました(笑) そんなわけでこの著作ができたわけです。これもすべて松永会長の厚いご支援のお陰と言えるでしょう(棒)←嫌味か! by 会長

なお、因幡は北京に行ったことはありません。あしからず。

それでは登場人物紹介を……

レミリア・スカーレット: 紅魔館のお嬢様。溢れ出すカリスマ(笑)

フランドール・スカーレット: レミリアの妹。ありとあらゆるものを破壊できる。

十六夜咲夜: 紅魔館のメイド。ナイフ常備。

紅美鈴: 今回の案内人で中国出身。普段は紅魔館の門番をしながら睡眠学習を行う。また、気を使う程度の能力を持つ。

パチュリー・ノーレッジ: 喘息で帰りました。

ご視聴ありがとうございました。

